

過激な盗賊たち

——イグナーツ・フェルディナント・アルノルトの盗賊小説——

Die exzessiven Räuberromane um 1800:

I. F. Arnolds *Die Grafen von Moor* und

Der schwarze Jonas

亀井伸治

要 旨

十八世紀末のドイツ語圏では、盗賊を主人公にした〈盗賊小説〉^{ロイバーロマーン}が数多く出版され人気を博していた。イグナーツ・フェルディナント・アルノルト（1774-1812）の『モール伯爵家』（1802）と『黒いヨナス』（1805）も、この流行に乗って書かれた。前者は、シラーの戯曲『群盗』を脚色して通俗小説化した作品であり、後者は、当時実在した盗賊の告白という形式による「犯罪実録もの」である。語りのタイプこそ違え、この二作はどちらも、他作品と比べると、極端な思想を主張したり、あまりにも異常な犯罪を行う盗賊が登場する点において、同ジャンルの中でも際立って特徴的である。特に『黒いヨナス』の残酷描写は常軌を逸している。ここには、読者の卑俗な嗜好の過激化がジャンル小説の文学的な質の低落を招くという問題が、すでにマスメディア時代の初期から露骨に現れている様を見ることができる。

キーワード

ドイツ文学、イグナーツ・フェルディナント・アルノルト、
盗賊小説、サド、啓蒙主義

—

1794年、フリードリヒ・ニコライ編集による十八世紀末の書評集『新・

一般ドイツ文庫』*Neue Allgemeine deutsche Bibliothek* (Berlin, 1793-1806) は、前年に出版された『伝奇的描写精選, 「往時の伝奇譚」の著者による』*Auswahl romantischer Gemälde. Von dem Verfasser der romantischen Geschichten der Vorzeit* (Zittau & Leipzig, 1793) という作品を採り上げて批評したが、そこには次のような記述が見られた。

御婦人方の私室から奉公人部屋まで、いまや総ての者が読書への抑え難い欲求を感じている。都市も田舎も読書会でいっぱいだ。しかし、教養を得たり、趣味を高める為に読む者は、読者の中でほんの僅かである。そんな状態だから、もし彼らの喝采があれば、その作家はそれを誇ることができよう。大多数の者は、読書を、退屈を紛らす為の阿片薬、追いかねばならない流行、感覚に対する心地良い刺激と見做している。それ故、しばしば、品のない小説や無意味な小説が成功を収めて版を重ね、恐ろしい幽霊譚や中世の騎士譚が氾濫しているのだ¹⁾。

義務教育制度の導入とそれに伴う広い階層にわたる読書能力の向上、活版印刷技術の改良、貸本図書館や書籍行商人など配付手段の展開によって前例のない量に拡大したドイツ語圏の読者層に向け、1790年代に入るとドイツ語圏での通俗小説の出版は急激な増加を見ており²⁾、読書は興隆しつつあった中産階級の余暇の活動のひとつとなった。そこで人気だったのは、幽霊や騎士の小説だけではなく、フリードリヒ・シラーの戯曲『群盗、悲劇』*Die Räuber. Ein Trauerspiel* (Frankfurt & Leipzig, 1781) の成功は、盗賊団を率いる盗賊を主人公にしたロイバロマン〈盗賊小説〉*Räuberroman* を生む契機となり、1790年代には、それは、ガイスターロマン〈幽霊小説〉*Geisterroman* リッターロマン〈騎士小説〉*Ritterroman* などと並ぶ、通俗小説の主要な一ジャンルを形

成するまでになっていたのである。上に引用した書評対象の本の作者は、ゲーテの義兄クリスティアーン・アウグスト・ヴルピウスだったが、彼の代表作『リナルド・リナルディーニ、盗賊団の首領、われらの世紀の伝奇的な話』*Rinaldo Rinaldini, der Räuber-Hauptmann. eine romantische Geschichte unsers Jahrhunderts* (Leipzig, 1799)こそ、ヨーハン・ハインリヒ・ダーニエル・チョッケの『大盗賊アベリーノ』*Abällino, der große Bandit* (Frankfurt & Leipzig, 1794)³⁾と並んで、盗賊小説大流行の幕を切って落とした小説なのだった⁴⁾。

チョッケとヴルピウスの作品の読者は、英雄的な態度の手本として、その盗賊たちを騎士と同等に扱った。ただし、ここでいう〈盗賊〉とは、あくまでも『群盗』のカール・モールがその古典的規範を示したような〈気高い盗賊〉や〈義賊〉を指している。盗賊小説の主流作品では、盗賊は、反社会的存在としてだけでなく、その特殊な素質を社会の拒絶によって開花させることができなかつた蹉跌した才能の持ち主として描かれた。腐敗した時代にあつて盗賊は、より高次の秩序を体現し、その暴力の使用も強奪の為ではなく、社会的な被抑圧者たちを国家の恣意の濫用から守る為のものとなされた。アンシャン・レジームの衰退に伴い、現存の社会体制への反抗を極端な形で描き出す機会が到来していたのである。そしてこれに、もっと刺激的な現代的冒険の題材を探していた作家たちの創作上の要請が加わった⁵⁾。

『アベリーノ』と『リナルド・リナルディーニ』の成功、とりわけ後者が忽ちにして全ヨーロッパ的名声を獲得したことにより、これら二作品から夥しい数の模倣作や垂流作が生み出された⁶⁾。また、それと平行して、実在の盗賊をそのまま題材にした、所謂「犯罪実録もの」も多数出版され、他の通俗小説ジャンルと同じく、〈盗賊小説〉というジャンルも、その流行の中で多様に展開した。

ドイツ語圏における通俗小説の未曾有の好景気は、十九世紀に入っても衰えることなく、1830年になってもなお、ライプツィヒの貸本図書館の目録には1700もの騎士小説と盗賊小説が記載されていたほどである⁷⁾。『一般ドイツ文庫』の註記に従えば、1773年から1796年までの期間に、六千もの数の長編小説がドイツで出版されたことになる。ニコライのこの「書評機関」は、まだ、あらゆる作品を、その文学的水準に関係なく論評することができた。高度な文学的言辞を用いた文学が少ししか流布し得なかった一方で、娯楽小説の洪水がドイツ全土を覆っていたのである。

本稿では、十八世紀末ドイツの作家イグナツ・フェルディナント・アルノルト Ignaz Ferdinand Arnold (テオドーア・フェルディナント・カイェタン・アルノルト Theodor Ferdinand Kajetan Arnold と表記される場合もある) (1774-1812)⁸⁾ による、種類の異なる二つの盗賊小説、『モール伯爵家、ある家族の描写』*Die Grafen von Moor. Ein Familiengemälde* (Rudolstadt, 1802) と『黒いヨナス、カプチン会士にして盗賊で殺人放火犯』*Der schwarze Jonas, Kapuziner, Räuber und Mordbrenner* (Erfurt, 1805) を採り上げ、盗賊小説のヴァリエーションの一端を眺めると同時に、これらの作品が、十八世紀末の文学潮流および出版状況の中でどう位置付けられるのかを考察しよう。

二

『モール伯爵家』⁹⁾ は、題名が示すように、シラーの舞台劇の成功に負う小説作品である¹⁰⁾。筋書きは、シラー作品の輪郭を大まかになぞっている。物語は、性格の合わない兄弟間の対立から始まる。弟フランツは、兄カールを最良する父を欺いて兄を勘当させる。美しいアマーリエは、悪の道に踏み込んで盗賊の首領となったカールが最後に弟に復讐を遂げるまでは彼を愛し続ける。これが小説の大枠である。しかし、それだけでは全体で六

百頁を超える二巻本の長さを埋めるには足りなかった。そこでアルノルトは、新たな登場人物を付け足し、それら脇役たちの話を語ることで、この問題を処理せねばならなかった。ここでは、盗賊団という集団の性格と、シラーの戯曲には倣わずに造形された盗賊団の女クリスティアーネが物語に果たす機能という二つの面に集中しよう。これら二つのモチーフの複合は、この小説の特色を理解するのに役立つはずである。

作中で、盗賊のひとりシュピーゲルベルクは、首領のカール・モールと対立する。彼は自分が盗賊をどう理解しているかを定式化して語る。

はっきり言うておくが、「盗賊の首領」とは、ひとつの形容矛盾だ。盗賊は、法の拘束から自身を完全に解放し、死と運命以外には自身の上に如何なる支配者も認めない自由な人間である。自然、友情そして愛のどんな束縛からも解き放たれ、人間社会の軛から離脱して、盗賊は、生の荒涼たる砂漠に、自身に対立する総てのものと永遠に闘いながら、たった独りで立っている。彼にとって自然は空虚で死んでいる。彼自身が、自らの天国であり地獄なのだ。広い世界は彼に何ひとつ与えず、彼は自分の生を自分で掴み取らねばならない。こんな者にとって、首領がまだどんな意味があるというのだ。(GuM, II, 206)

盗賊が市民社会に対立する存在であるとしている点は、他の多くの盗賊小説と同じである。ただし、アルノルトは、社会の対極にある極端な個人主義にアクセントを置いている。この反社会的存在の「生の荒涼たる砂漠」とは、まさに、トマス・ホブズが言うところの「万人の万人に対する闘争」が支配する場所に他ならない。そして、自由は平等への要求に結び付けられる。

盗賊による社会が成立するには、それは平等な社会でなくてはならない。つまり、そこでは、ひとりの人間が他の人間と同等の権利を持ち、また、誰もが同等の財産を、縮減されることも、侵害されることも、税を課せられることもなく取得できる、そんな自由な人間たちの共和国だ。共同して強奪するなら、分け前は均等だ。何か結論を出さねばならないときには、皆の意見を集めて決めるのだ。だから、自分は甘い汁を吸い、手下にはそのおこぼれに与らせるような〈首領〉は何のためにあるのかと言いたい。(GvM, II, 207)

シュピーゲルベルクのこの徹底して政治的な考えの過激さを前に、カールの盗賊仲間たちはひるむ。彼らにとって、盗賊の社会のあり方と自分たちの立場は、友情や兄弟仁義によって基礎付けられている。これは、家庭と盗賊団、町や村と森といった、小説世界の空間を構築している内部と外部の差異を持った社会モデルを明確にするものであると共に、盗賊団の構成員を、その犯罪性や残酷さにもかかわらず、人間的で気高い〈義賊〉に見せる小説の仕掛けでもある。

誠実と信頼、親子分や兄弟分の関係は、おそらく、これまでの人生に照らしても他とは比べようのない俺たちの盗賊団の神聖な支えなのだ。仲間のためがあるから俺たちは存在することができる。俺たちは皆、誠実だ。しかし、俺たちの盗賊団は、その結成以来、とりわけここ数年、恐ろしいほど大きくなり、時には、仲間に忌々しい奴らも加わることになった。(GvM, II, 195)

首領がその責任を負う不断の統率と規律が盗賊たちをまとめている。これを批判するシュピーゲルベルクの場合には、その処置として苛烈な方法

が必要となる。すなわち、彼は死なねばならない。シュピーゲルベルクは次のような別れの言葉と共に殺される——「悪魔のところへ行き、殺人放火犯も忠義や誠実さを持つことを知っているのだという話を悪魔にしてやるがいい」。(GvM, II, 209)

しかし、どんなに気高い盗賊であっても、彼らはやはり盗賊以外のものではない。さもなくば、彼らは彼らの存在意義を失い、彼らであることをやめてしまう。あるいは、文学の問題として言えば、その点に盗賊小説というジャンルの存在がかかっているのだということになるだろうか。それ故に、彼らは、シュピーゲルベルクの後に、今度はクリスティアーネも排除せねばならない。なぜなら、彼女は、小説の中で繰り返し、カール・モールに真人間になって盗賊の仕事から足を洗うようにと戒めるからである。彼女の処分によって首領は一層強く盗賊団に結び付くはずだと仲間たちは考えるのだ。

ここでは、あくまでも男たちの集団が中心的な話題なのだ。盗賊の資質を与える英雄主義ヒロイズムは、荒々しい戦闘的な外的世界に属している。それは、女性や家庭のために相応しい場所ではない。アルノルトは、クリスティアーネの人物造形においてそのことを明確に表現する。裕福な商人の娘として、彼女は学生だった頃のカールに恋をした。彼の負債を支払うために父の口座の金を流用し、それが元で、父はいかさまな商人とされて破産して死ぬ。「クリスティアーネ」という示唆的な名前を持った女性として彼女は「より良い人生に戻って頂戴」(GvM, I, 312)と愛するカールに訴え、市民生活への回帰を促し続ける。しかし、その一方で「首領の女」としての彼女は、彼の傍らで男装して闘い、こう約束もする——「そうして私たちが勝利したら、あなたのすぐ側で戦った友らは、わたしのすべてを手に入れるのよ。愛の享樂で勝利に報いるわ」(GvM, I, 232)。シュピーゲルベルクのように、彼女はここで、全員への愛という過激な平等を喧伝する。

この性的献身の覚悟にもかかわらず、その一方で、クリスティアーネは、カールとの排他的な感傷的關係を保持している。それは、「人間性と和解して頂戴」(GuM, I, 230) と言ってカールを人間的にしようとするが故に、盗賊団の栄光の中にある彼を脅かすものである。盗賊たちはこの関係が抱える問題を認識している。

〔盗賊の首領〕はひとり人間だ。彼は自分を変えることができる。そして、忌々しい人間、あのクリスティアーネが、彼に時折とっぴな考えをもたらす。彼女の泣き喚きが、彼をまるで子供のように柔にしていまい、多くの儲かる殺しや思い切った行為をさせないようにしてしまうんだ。——彼は感傷過多になる——道学者っぽい染みがついたように。それには俺は気分が悪くなる。俺の言うことを信じて欲しいんだが、もし愛が彼を弱々しくしなければ、彼はもっと偉大で、もっと勇敢になるだろう。(GuM, II, 198)

ここでは、「人間」Menschという言葉が多義的に用いられている。それはまず、改善あるいは悪化の可能性を持った、将来どうなっていくのかが分からない不特定の「人」一般を指している。次に、それは中性名詞としての意味(「娼婦」「あばずれ」)で、女性の人格を貶めることに使われている。もし、「人間」という言葉が、それに相応しい感情や憐憫の内に示される道徳的なもの、あるいは人道的なものを表すのなら、感傷性は肯定的に捉えられるのだが、ここでは逆に、女性的なものと同義として扱われている感傷性が、男性的な行動力を低下させるものとして否定的に評価される。いずれにせよ、上のどの意味においても、「人間」は盗賊の反対概念となっている。従って、盗賊が人間的であろうとする限り、その盗賊はひとつのパラドックスを体現することになる。この矛盾こそが、

ドイツの盗賊小説の主流作品の本質だと言うことができよう。

首領を完全に自分たちの内に繋ぎ止めようとして、クリスティアーネによる「人間性」の束縛が取り除かれる。仲間たちは、カールから素早く武器を取り上げて身動きできないようにし、「女」を処分する。

別の者がクリスティアーネにナイフを突き刺している間に、彼女の体はバラバラに切り刻まれた。腕と足は残忍に切り離された。嘲りの声と共に、彼らはそれらの手足を乱暴に弄び、地獄の歓喜の雄叫びをあげるのだった。(GvM, II, 257)

クリスティアーネの殺害は、盗賊団の掟と盟約を保証するひとつの象徴的行為ではあるが、同時にそれは、仲間たちの期待とは裏腹に、カールを盗賊団から離れさせるものともなってしまう。その理由をカールはこう説明する。

妊娠した女——お前たちはクリスティアーネが妊婦だったと分かっていただろう——の血は盟約を解消させた。クリスティアーネはわれわれみんなの仲間だったから、お前たちは、われわれの盗賊団の血を流した訳だ。だから、盗賊団はおしまいだ。それに、お前たちは他の仲間の財産を侵害したのだ。クリスティアーネは俺の女だったのだからな。お前たち自身がお前たちの盟約に違反したのだ。お前たち自身が俺との関係を壊したのだ。お前たちは、小癩にも、俺の命令もなしに殺しをやった。そしてこれは、お前たちが俺への服従を拒んだというひとつの徴だ。俺はお前たちの首領だった。お前たちは解散だ。(GvM, II, 257-258)

この台詞の後に、演劇的な退場場面が続く。「威厳をもって彼は一味の間をゆっくりと進んでいった。そして、ひじょうな驚きと共に彼を見送る仲間たちに別れを告げた。——」(GoM, II, 258)

カールは故郷へ戻り、彼のすべての犯罪行為に責任があると考えられる弟フランツに復讐する。フランツを殺したカールは言う、「かつてのわたしも、いまのわたしも、そしてこれからのわたしも、わたしは、(フランツの死骸を指しながら)この悪党のせいなのだ。わたしと彼の間には神が裁きを下されんことを」(GoM, II, 268)。この復讐によって、カールにとっての過去は終わる。だが、アマーリエは、カールが実の父と弟を殺害したことで彼を忌避するようになる。ただし、彼が犯した他の不法行為は、明らかに彼女の勘定には入っていない。心痛のあまり、彼女は一年ほどの内に死ぬ。物語の結末は、元になったシラーの戯曲ほど悲劇的ではない。小説はこう締め括られるからである。「[カールは]盗賊および殺人者として長く帝国追放の身となった。やがて、ついに、ウィーンの貴族社会の友人たちの取りなしによって皇帝から恩赦が下った。彼はタウテンベルクの男爵令嬢と結婚し、そうして、自分の家を存続させたのである。」(GoM, II, 272)

三

盗賊を主人公にしたアルノルトのもうひとつの小説『黒いヨナス、カプチン会士にして盗賊で殺人放火犯』¹¹⁾は、実在の盗賊シンダーハンネス(ヨハネス・ビュックラー)の盗賊団で指導的役割を果たした共犯者ヨーハン・クリスティアーン・ラインハルトの人生を、彼の独白によって描き出す(副題に「悪名高いシンダーハンネスの恐るべき仲間による血まみれの話」とある)¹²⁾。その回想はアルノルトの創作であり、今回テキストに用いた覆刻版に解説を付しているハンス・フリードリヒ・フォルティンによれば、ラインハルトの実際の行状とはほとんど関係がない¹³⁾。標題に加えられた

「審問調書から」という文言や、「文書に基づく出来事は全くの真実である」(Sj, IV) と作品の「序言」が告げるのは勿論まやかしてである。

それまでの盗賊の伝記では通常、一人称の語りの形は採られていなかった。一人称形式による主観的視点は、犯人の内面を語る犯行動機への関心を基礎に置くことによって、啓蒙主義末期における犯罪譚を通俗小説に導入するのに寄与した。十八世紀の啓蒙主義者たちは、犯罪者が最初の犯行に関連した動機や環境の影響に関心を抱いていたのである。啓蒙主義的な法律家の立場は、例えば、アウグスト・ゴットリーブ・マイスナーが『小品集』 *Skizzen* (1-10. Sammlung, Leipzig, 1778-90; 11-14. Sammlung, Leipzig, 1796) に収載した伝記の類に表れている。このマイスナー作品の中では、主として口述による情報源から著者が知ったローカルな犯罪の内容が語られている。ただひとつの例外は、広く一般に知られていた犯罪者「犬革職人」についての「犬革職人と亜麻布職工」 *Hundssattler und Leineweber* (1796) であるが、これは同時に、その伝記集の中で盗賊を扱った唯一の話でもあった(その他は、殺人者、放火犯、偽造犯などが話題になっている)。

しかし、同じく当時の有名な盗賊を扱っていても、そうした啓蒙主義的観点は、『黒いヨナス』が企図するところのものではなかった。『黒いヨナス』はむしろ、処刑台に終わる自身の悪化の過程を、ただ事実に沿って報告するという、犯罪者の伝記のより古風な物語規範へと帰って行く。その中では、犯罪者である主人公に対する同情や心理学的興味はほとんど喚起されることがない。テキストは、厳罰を認知させ、誤った行いを正して読者を教化しようとする伝統的な犯罪実録に倣ったテキストに相应しく、こう始まる。

両親について語れば、彼らの遺灰を冒瀆することになるだろうから、彼らについては何も言うまい。しかし、彼らの教育と、彼らの許

で、そして彼ら自身から俺が見聞きしたことが、俺を、いま処刑を目前にしている怪物にしてしまったんだ。もし別の環境にあったなら、有能と勇敢さが活かされるようなもっと立派な人間になっていただろう。なのに、いまの俺は、ただのケチな強盗で、人殺しで、死刑を宣告されたろくでなしだ。(SJ, 1-2)

これによって、小説全体の筋立てが提示され、小説の語り手が、如何にして、また何によってこの種のテキストのフォーマットを埋めているのか、如何にして読者の関心を惹くのか、という疑問に答えが与えられる。物語が最終的に断頭台へと至ること、そして、更正について如何なる見通しもない犯罪的環境下に、やがて「その地域の恐怖の的」(SJ, 17)となる主人公の生い立ちが、最初から確定しているからである。

伝記の原則に従って小説はこの悪党の子供時代から始まるが、親による本来の教育は当然ここでは重要ではなく、彼らの影響はただ不道徳な犯罪者の手本としての効果に限定されている。例えば、主人公の母の姿は次のように描写される。「すでに子供の頃には、彼女は、両親や隣人や友人たちから盗みを始めていた。いかなる打擲も警告もその嘆かわしい性癖を抑えることができなかった。[...] 彼女は金のためなら自分の肉体の魅力を誰にでも委ね、自身一度語ったところによれば、十二歳でめでたく処女とおさらばしたのだった」(SJ, 3)。そうして娼婦となった彼女は、富裕な初老の独身男を籠絡して、誰の子とも知れぬお腹の子（これが後に主人公となる訳であるが）を彼の種と認めさせ、妻の座に収まる。しかし、相変わらず彼女は男出入りが激しく、「いまや彼の住居は娼館と化した」(SJ, 12)。ついに男に捨てられて経済的庇護を失った彼女は落ちぶれ、そうして息子はならず者になって行く。小説のこの部分では、手本となる親の行為——この場合には悪習を次から次へと重ねると言う他ないものだが——が印象

的に描写されている。同じく、以後の犯罪の挿話を語るにおいても、個々の局面を強調することに配慮が払われている。これは、その都度、読者に十分な刺激を与えて退屈しないようにするためだ。

娯楽小説の書き手としてアルノルトは其上、それら犯罪描写の効果の連続に読者が飽きてうんざりすることも想定し、それを回避する為の別の手段も用いている。すなわち彼は、犯行の種類も変えつつ、その恐ろしさの度合いを漸次高めて行くのだ。盗み、教会への押し入り、売春の斡旋と娼婦の殺害、等々。性的なものとの犯罪的な暴力の結合という、エロティックな通俗文学では珍しくはないにせよ、それらではまだ比較的控えめに表現されていた事柄が、戦慄の喚起を狙ったこの作品では、ほとんど自明のものとして衝撃的な形で表出する。その煽情性と変態性の度合いが一体どんな水準にまで達するかは、これから順次引用する箇所によって明らかになるだろう。

最初の引用は、主人公の初めての殺しの場面である。主人公は十六歳にしてすでにヒモ稼業に精を出している。しかし、彼の情婦でもあるマルトは、ある声望ある市民相手に妊娠してしまう。相手はスキャンダルが公になることを恐れ、解決策として慰謝料を支払うことに合意する。ヨーナスは彼女が受け取ったその金を全額せしめてやろうと密かに目論み、何も気付いていないこの娘を森の中の人気のない場所に連れ出す。

俺は彼女に金を見せるよう指図して、こう言った。「俺に少し駄賃をくれてもいいんじゃないか」彼女は三カロリン差し出した。「金なんかいらねえよ。可愛いマルトちゃん」それが俺の答えだった。「全部取るときな——でもな——俺はお前を楽しみたいのさ。一緒に藪に行ってお前を味わわせてくれよ」この申し出は、彼女にとっては現金を差し引かれるより都合が良かった。彼女は自身を俺の好きにさせる

ことにして、俺と共に藪の中に入って行った。俺は人が踏み入ったことのない場所へと彼女を誘き寄せた。ここなら彼女を全く俺の思うがままにできる。俺は彼女の胸に顔を埋め、そして彼女が罪深い歓びに恍惚となって快樂に我を忘れてる内に、横になったまま、意図を持って隠しておいたナイフを取り出し、彼女の胸を裂いてぶっ殺したのさ。彼女は暴れ狂って飛び上がったが、地面に倒れ、すでに俺の足元に伏したとなつては、彼女を起き上がらせないようにすることなど俺には見戯にも等しいことだった。彼女の上ののしかかると、俺は幅広のナイフをその体に突き刺した。そうしてさらに、胸と下腹部をズタズタに切り裂いた。不安の中で俺は、ゴロゴロと喘ぎながらもいまだ哀願する彼女の喉にとどめを刺すのを忘れていた。その喉笛を切ると、ヒーヒー呻く彼女を血溜まりの中に転がるままにして、金を持って急いでその場から立ち去った。(SJ, 47-49)

胸や下腹部の切り裂きという描写は新しい。その前触れは、先に引用した『モール伯爵家』におけるクリスティアーネの惨殺場面のようには、アルノルトの別の小説にも散見される。しかしながら、『黒いヨナス』におけるこの描写は、より具体的で詳細であり、もっと激しい。性的な下地の上に置かれた極度の暴力がテキスト全体を貫いている。やがて、バンベルクではヨナスは、四週間で「少なくとも十二人から十三人の情婦」(SJ, 202)を孕ませる。彼女らには墮胎薬が投与され、その薬のせいでは八週間で十五人以上の女性が死ぬ。次第にエスカレートする鬼畜の描写の極点は、盗賊団がねぐらにしているシュベッサルトの宿屋の場面である。

少女たちや美しい女たちが手に入ると、彼女らは、その核となる者たちが大部分ここに集まるようにしていた一味全体に共有され、息を

引き取るまでずっと皆の慰みものとして使われた。女が美しい場合には、俺たちは長く生かしておこうと気をつけて扱い、力をつけさせるために肉のスープや葡萄酒や焼き肉も与えた。しかし、女が妊婦だった場合には、徹底的に凌辱して死に至らしめた。あるいは、女に飽きた時には、地下室で短剣によって始末した。めずらしく三日以上生きていた美少女がいたが、俺たちは最初の二十四時間までで彼女を使いものにならなくしてしまった。[...] 地下室は屍体でいっぱいになり、骨が高く積み重なって山をなしていた。(SJ, 248-249)

そして、主人公たちの非人間的所業は、^{ネクロフィリア}屍姦、死体損壊、ついには、^{カニバリズム}人肉嗜食にまで及ぶ。

壮年の家庭教師と駆け落ちしたうら若い伯爵令嬢は、その逃避行の途中、運悪く盗賊団のねぐらに行き当たってしまう。主人公たちは、家庭教師を組み伏すと猿ぐつわをかませ、絶望する彼の目の前で令嬢を輪姦する。

それは、彼女の恋人である四十歳になる屈強な野郎と、処女であることを俺たちが証明することになったお嬢さんだった訳だが、彼女は、荒々しい欲望に組み敷かれて息を引き取ってしまった。彼女は死んでもなお、ひじょうに魅力的だったので、一晩中、空が明るくなるまで俺たちはその死体を犯し続け、ブランデーをがぶ飲みした。彼女の恋人の方は、棍棒で頭を一撃すると、もう起き上がらなかった。俺たちは二人の死体を地下室に投げ込んだ。(SJ, 261)

人肉食の描写に関しては、当時ゲオルク・フォルスターの旅行記などを通じてヨーロッパに伝えられていた人喰い人種の習俗の報告に日常的な料

理のレシピを結びつけて叙述されている。それは、イロニーや諷刺のニュアンスがかけらもない、ただ即物的な描写であるが故にその残酷さが際立つ。

俺と仲間は、自然の引いた境界線からあまりにも後退していたので、殺した者たちが健康で若い場合には、その肉を食べるまでになっていた。——美しく壮健な若者はいつもの手順通りに刺し殺し、そして、俺たちが楽しんだ少女は焼かれて食べられた。俺たちの客にも、豚肉の代わりに、あばら肉を焼いたのや塩漬けにした小関節の部分をザウアークラウトを添えて出した。人間の体の部位の内でも、手と指先の間の肉、連続する指の骨から手首までのところをこそぎ落とした肉ほど繊細な味わいものはない。少女の乳房は、西洋風蝶木の漬け汁やレモン果汁に浸して、あるいは、ねり粉をまぶして焼いたりすると、俺たちには美味しいご馳走となった。(SJ, 249-250)

こうしたとてつもなく不快な残酷描写は、すでに同時代人からも強い拒絶を示された。『新・一般ドイツ文庫』の評者は、『黒いヨナス』を「流血と殺人の小説」のひどい作品のひとつに数え、「その内容と同じく書き方も野蛮」であり、「吐き気を催させ、残酷で、忌まわしい描写ならどんなものでも好きな者は、この作品に満足するだろう」と述べた¹⁴⁾。1806年2月26日付の『イエナー一般文芸新聞』*Jenaische Allgemeine Literaturzeitung*も、この作品を「恐ろしい料理あるいは血まみれの料理」と呼び、否定的に論評している¹⁵⁾。

主人公ヨナスの造形は、騎士小説における高潔な騎士や、『リナルド・リナルディーニ』流の盗賊小説に登場する義賊とは鋭い対照を為している。どうして、ここまでひどい盗賊像が出現するに至ったのか。以下にそ

の背景を探ろう。

四

性的なものと暴力のこのような極端な結合が1800年頃の文学テキストに現れたことについて考えるとき、すぐに想起されるのは、同時代のサド侯爵の小説であろう。アルノルトと同じくサドもまた、『ジュスティースあるいは美德の不幸』*Justine, ou les Malheurs de la vertu* (en Hollande, 1791) や『ジュリエットあるいは悪徳の栄え』*Histoire de Juliette, ou les Prospérités du Vice* (en Hollande, 1797) で、主人公の「話」をもっともらしく見せるべく一人称の語りを用いた。また、サドの作品でも、性や暴力の対象となる人間たちは、『黒いヨーナス』の被害者たちと同様に、悪人たちにただ玩弄されるだけのオブジェの如くに描かれている。しかし、アルノルトとは違い、サドは規範に対する違反を犯すのみならず、同時に、その「侵害される規範の体系」¹⁶⁾を神学的な言説の内に反映させようとする。規範を巡る論議は、アルノルトでは、『モール伯爵家』の中で、シュピーゲルベルクが盗賊の社会の択一的な理解について定式化する場面で付加的にはあるが現れていた。他方、『黒いヨーナス』には、そうした論議を求めても無駄である。ここでは、性的な暴力はいかなる論理にも基づくことなく、ただ「自然の引いた境界線」(SJ, 249) からずっと退いたところに位置する残忍な欲望に突き動かされているだけだ。

もし、同時代にドイツ語に訳されたサド侯爵の唯一のテキストとして、1803年にそのドイツ語版がライプツィヒのヴィルヘルム・ラインから出版された短編集『恋の罪、悲壮小説集』*Les Crimes de l'amour, Nouvelles héroïques et tragiques* (Paris, 1799-1800) を引き合いに出すなら、両者の違いは一層明確になろう¹⁷⁾。サドの作品としては「合法」であるこの作品では、いかがわしいポルノグラフィ的な要素と哲学的な言辞の使用は手控え

られており、その物語は一種のゴシック小説として提示されている。作中の一篇「ロレンツァとアントニオ、イタリアの物語」*Laurence et Antonio, nouvelle italienne* は、悪漢の貴族カルロ・ストロツィが、父とは正反対の立派な性格の息子アントニオの美しい嫁ロレンツァに欲情し、息子が戦場に出て不在の間に、さまざまな策略を巡らせてロレンツァの体を手に入れようとする物語である。ここではサドは、彼の貴族的で遊蕩児的^{リベルタン}な傾向に従って、悪人の観点から語るのを好んでいる。例えば、サドが、「障害に出くわした時のストロツィのように、障害というものとは魂を刺激して残酷な気持ちにさせる」¹⁸⁾と語る箇所などにそれは表れている。『黒いヨナナス』においては、個々の暴力行為が読者の注意を引くのに対して、サドのこの作品では、策謀や復讐の計画、内的な苦悩が中心に置かれている。これは、多くの要素の連鎖と緻密な設計に基づく複雑な筋立てを要求する。なぜなら、失神したロレンツァ、すなわち無防備な状態の生贄を前にしながらも躊躇するストロツィが、策謀の共犯者カミッラに自問しつつ語る次の台詞が示すように、ここでは、性的な欲望をすぐに満足させることが重要ではないからである。

カミッラ、わたしがこの瞬間を捉えないのはなぜなのだ。何が邪魔しているのだ。——いや、いや、あれの愛を呼び覚ますことができぬのなら、もっと怒りを煽り立ててやろう。あれが微睡みの腕に抱かれているときにわたしが征服すれば、あれもそれほど不幸でもなからう¹⁹⁾。

まさにこの引き延ばしが、夫アントニオによる最後の救出に必要な時間を許してしまう。サドは、確信的に、最終的には貞操の美德と愛があらゆる試練と術策に打ち勝つという引き延ばしのモチーフを、誇張した形で

用いている。大団円では、ロレンツァのそれまでのすべての苦難は忘れられる。

抱擁と祝福が、程なく、彼女にあらゆる苦難を忘れさせた。彼女を取り巻く幸福と、気高い夫がその後、四十年間にわたって妻に与えることになった至福によって、かつての苦しみは、純真で無垢な彼女の魂から完全に消え去ったのである²⁰⁾。

この幸福な結末は、『モール伯爵家』の末尾——「ロレンツァとアントニオ」に比べるとかなり低減された状況ではあるが——を思い起こさせる。アルノルト作品のカールにとっては、盗賊という身分は仮初めであり、彼はほとんど問題なく市民生活に回帰しようとする。すると、もうそれ以上に話が続くことはなく、主人公のそれまでの不法行為も忘れ去られる。このことが、カールの復讐物語の顛末を、サドの小説における迫害された主人公たちの救いある結末に結び付けている。こうした結末は、しかし、それが創作であるという信号を強く発している。別の言い方をすれば、それは、いま小説を読み終えつつある読者が、恐ろしい出来事の世界を離れんとしていることを意味していよう。

これに対して、『黒いヨナス』の主人公は、断頭台で生涯を終える。回想部分は創作だが、そのテキスト内容の終結としての彼の処刑は歴史的事実である。告白部分を囲む逮捕・処刑という枠組みは、枠内で語られている出来事を読者の現実に接続する機能を持つ。それ故、『黒いヨナス』の終わりは、上に挙げたサド作品や『モール伯爵家』のような自閉した虚構世界としての物語の完結とは違う。これは、『黒いヨナス』が拠り所にし、作者の創作がそれに負っているテキストの種類——犯罪者の伝記や犯罪の報告といった実録——の性質から生じている。『黒いヨナス』は

一般的な盗賊小説の型に嵌まっていないが、依拠した資料の型には従っている。そこで、この小説の描写の過激さについて考えるにあたり、今度は、怪物的な犯行を語る実際の犯罪者の伝記や他の死刑囚の告白に、その比較素材を探し求めよう。

盗賊という題材に関心が向けられた前提には次の三つがあった。第一の、そして最も古いものは、民間教育におけるキリスト教的な倫理学である。第二の契機は、啓蒙主義者による刑法改革の動きから発した。そして第三は、同時代の社会の慣行、すなわち、その時代の盗賊行為自体への興味によるものである（これには、犯行に対する恐怖や嫌悪が含まれている場合もあれば、盗賊小説の主流作品への読者の見解について冒頭で述べたように、義賊的な盗賊やその反社会的行為に対する共感や同情が含まれている場合もある）。

神学者や法律家について言えば、予てより彼らは、種々の目的に活かすべく、盗賊を始めとする犯罪者の実話の出版物を好んで利用して来た。例えば、1719年に刊行された、盗賊リップス・トゥリアンの伝記『良く知られた泥棒で殺人者にして盗賊のリップス・トゥリアンとその共犯者たちの人生と悪事』*Des bekannten Diebes, Mörders und Räubers Lips Tullians und seiner Complicen Leben und Ubelthaten* (Dresden, 1719) の副題に「神の正義と慈悲、そして罪人の戒めと改心を考えて」とあるように、神学者たちは犯罪者の事跡の援用を狙った。彼らは、見せしめによるのが、善導と予防に最良だと信じていた。それ故、主に、恐怖を掻き立てる拷問や処刑が、犯罪の帰結として前面に押し出された。また、特に法律家や公安官には、もし世間が犯罪者に同情を寄せ始めるようなことがあれば、その犯罪者を大悪人として印付けようとする傾向があった。

神学者も法律家も、自分たちの理念を可能な限り広い領域に行き渡らせようと努め、その際、彼らは共に、道徳的、あるいは法律的な立場と原理

を文学化するという手段を通じて教示と娯楽を結び合わせ、読者の猟奇的興味を利用つつ啓発するという方法を用いた。神学者の側からのものとしては、牧師のクリスティアーン・フリードリヒ・ヴィッティヒによる、ジプシーの盗賊ハンニケル（ヤコブ・ラインハルト）の伝記『ハンニケル、あるいはネッカー河畔のズルツで捕縛されて一千七百八十七年六月十七日に処刑された盗賊と殺人者の一味、犯罪調書に基づく真実のジプシー小説』*Hannikel, oder die Räuber- und Mörderbande, welche in Sulz am Neckar in Verhaft genommen und am 17. Juli 1787 das justifiziert worden : Ein wahrhafter Zigeuner-Roman ganz aus den Kriminal-Akten gezogen* (Tübingen, [1787]) を挙げるができる。

盗賊小説研究者のホルガー・ダイナートは、『黒いヨナス』と比較し得る犯罪実録テキストの一例として、1782年にヴィーン出版された、ある小冊子を挙げている²¹⁾。それは、ハンガリーでの残虐な殺人と人肉食について語っているが、そこには、十八世紀末のこの種のテキストが持つ問題があからさまに表出している。まず、この小冊子の著者とされている「クリストフ・アインジードゥル」という名が筆名なのかどうか分からないし、記事の内容自体も、はっきりとした時と場所の指定を避けており、犯人や被害者の名前も、それどころか処罰についての記載すらなく、極めて曖昧なのである。十七世紀にも、多重殺人、男色、人肉食といった異様な犯罪の少なからぬ事例についての自白を載せた小冊子が存在した。しかし、それらと十八世紀末のものとの違いは、事件が起きた時や場所、犯人などについての具体的かつ詳細なデータと、その場にいた証人の証言が精確に明記されているということである。そのすべては法的に確証されたものであり、裁判記録に基づく記載をそこに見て取ることができた。十八世紀末の小冊子における、報告の検証を困難にする曖昧さは、その検証が不可能ではない場合にはとりわけ、情報の信憑性に対する重大な疑惑を引き

起こす。これは、記載された殺人件数の大きさに対する疑いを抱かせるだけでなく、深淵への眼差しを開く自白の内容が誇張されたものではないのかという疑念によっても強められる。この小冊子では、自白によって小者の犯罪者が大人数の殺人集団の首魁だと判明したと語られるのだ。『黒いヨナス』からも発生し得た、自白の「真相」を巡る問題は、検証し得る記載事項の不足を懐疑することから生じるだけではなく、別の凶悪犯罪にも容易に適用可能な、その内容を構成する要素の不特定性と単純さにも起因する。自白は処罰の根拠を提出し、その自白が告げる犯罪の残酷さが大きければ、それに見合うまでの暴力的な処刑方法が認可される。この機能が全うされるべく、つまりは、語られた部分の役割が全うされるべく、課せられた刑罰に合わせ、場合場合に応じてテキストの内容が変更されてしまう（順序が逆さまだが）。苛酷な刑罰を正当化する為には、対象となる盗賊たちは、そうした処遇に値する情状酌量の余地無き極悪人として描かれねばならないのだ。こうして、十八世紀末のテキストは、犯罪者像を、それぞれの犯罪により適した事例に依拠して誇張して描くようになる。さらに、犯罪実話や悪人の伝記は、豊かに脚色されるにとどまらず、出所の確かな資料から離れて自由な叙述へと向った²²⁾。そして、この創作傾向は、その後の通俗的な盗賊の伝記にも継承されたのである²³⁾。真実らしさを演出する〈告白〉という形式に気を取られていると、テキストの虚構性からつい眼が逸らされてしまう。ここには、1800年頃の、暴力犯罪に関する近代初期の言説化における明らかな変化が認められる。

このような虚構化は、ジャンルの真実欲求を破壊し、本来は司法の権威に寄与するジャンルのはずが、逆の効果を与えてしまう。実際、そうした文学化により、犯罪記録についての信憑性が突き崩され、司法機関の権威は危機に晒されてしまっている。また、テキストが出所を隠すことで読者の好奇を自身の目的に使用することは、秘密出版によって助長されていた

暴力と性に対する放埒な空想を自由な空間へと開いた。これによって、次第に焦点は、事実の正確な伝達ではなく、メディアがどう表現するかということに移って行ったのである。ここから、同じ〈盗賊小説〉でも、義賊を扱った諸小説とは異質な、ひたすらに恐ろしい効果を目指した、通俗的な小説形式による盗賊の伝記への直接的なラインが引かれた。

この種の盗賊小説は、死刑囚の告白の持つ犯罪抑止効果を示すことを諦めている訳ではないが、むしろ恐怖刺激を積極的に求める読者に向けて書かれているのである。そのような読者の嗜好を満足させ得る簡便な方法が、極端な性描写と暴力描写だった。いまや、それらの小説の目的は二つに分岐しており、しかも、それがいささか偽善的な形で現れていることは明白である。つまり、作家たちが、嫌悪すべき犯罪を微に入り細を穿って描き出すことで道徳的な教化を標榜する一方、彼らは、犯罪の衝撃的な残酷さや猟奇性を利用し、販売と利潤の為に読者にそれらを提供しているのだ。十八世紀末の通俗小説を支える〈啓蒙〉と〈娯楽〉という大きな二つの柱の間には葛藤が進行していたのである。『黒いヨナス』のような作品では、〈啓蒙〉はもはや〈娯楽〉とは共生し難くなっており、前者は、後者によって余りにもぞんざいに扱われ、説得力を失っている。テキストが作り出す恐怖や意図的な嫌悪の指し示す方向が、犯罪防止の綱領的な考えからすでに離れてしまっていることを誤魔化すことはもうできない。そして、そこにあるのは、洗練された悪漢の描写や練り込まれた語りを知っているテキストとは別種のものであり、また、そうしたものを読む楽しみを与えるものでもない。

ところで、十七世紀の犯罪実話小冊子と十八世紀末のそれとの、もうひとつの目立った違いは、前者では、幼児の殺害とその死体損壊のような猟奇的犯罪が、魔法や魔術の為の犯行とされていることである。また、女性の強姦や殺人も、魔術の実践と関連付けられた。十七世紀の小冊子は、こ

うした異常犯罪とその死刑判決に至る過程については殊更詳しく伝えたが、その他の大抵の事件については、ごく簡単に述べるだけだった。常軌を逸した犯罪を魔術の文脈に置くことで、小冊子は、その犯罪の違反性と規範侵害の性質を強調すると同時に、そうした侵害についての説明を可能にする宗教的秩序と異端という枠組みを提示するのだ。犯行は、被害者に対するものとしてだけでなく、神の秩序に挑戦する悪魔的なものとして捉えられた。だが、魔法や妖術は、1800年頃にはすでに、物語を解釈する枠組みとしての説得性を失っていた。それらは、やがてロマン主義や幻想的な文学におけるモチーフにその場所を変え、E. T. A. ホフマンやクレメンス・プレントナーの作品（黒魔術師の盗賊を描くホフマンの「イグナツ・デンナー」Ignaz Denner, 1817 など）で再びわれわれの前に浮上することになる。極端な暴力行為は、もっと「現実的な」根拠を求めるようになっていた。啓蒙主義の許で超越者による秩序体系から解放された主体は、いまや、自身で責任を負わねばならない。もし、病んだ心や社会的環境が、その主体の作為能力を制限しているのでなければ、欲望の充足、利己主義、個人的な悪徳などが問題になる。そして、そうした事例は、先のマイスナー作品のような啓蒙主義的観点による犯罪譚や経験心理学による著作によって扱われることになる。また、そこでの語り口は、その著述家の考えや体験を基盤とした個人の創作能力によって左右されるはずである。つまり、以前の犯罪実話とは違い、その語りには、書き手の〈作家性〉が大きな役割を果たすということだ。事件の見方においても、それを語る語り方においても、いずれにせよ、それまでの犯罪実話といった古い物語の場所は役目を終え、新たな形式がその場所を占める。

しかし、すでに述べたように、『黒いヨナナス』におけるアルノルトは、こうした動向にはまったく乗っていない。彼は、暴力行為を、犯罪実話というその参照枠からそのまま剥き出しで表現した。盗賊の自伝を書こうと

した時、アルノルトにとっては、ひとりの人間がどのように悪に傾斜するのかというその過程を作家として主題化する機会が与えられていたにもかかわらずである。『黒いヨナス』では、主人公の経験に文学者の視点から省察を加えることができそうなエピソードが出てきても、なおざりにされている。例えば、少年時代のヨナスがシラーの『群盗』を観劇する挿話を見てみよう。その戯曲により「盗賊として生きるという考えは、気性の激しい少年たちの脳髓を燃え立たせ、そうして彼らは、徒党を組んで盗みに出かける」(SJ, 21-22)ことが予告される。劇場を訪れた少年たちの期待は大きい。

へえ、ここじゃ悪党たちの話が上演されているんだ、と俺たちは思った。盗みが行われ、さまざまな悪だくみや手の込んだ盗みが見られるんだからな。俺たちはここからいろいろ学べるだろうな。(SJ, 22)

劇を見終えた彼らは、盗賊という存在に熱狂する。

俺たちがはじめに期待したものは、見つからなかったけれども、群盗の場面を見た俺たちの内には新しい感情が湧き起こった。どの少年からも恐れが消え去った。勇士の感覚が俺たちの中を貫き流れ、誰もが自分を、カール・モールやシュヴァイツァー、コジンスキーあるいはロラーのような人物だと思い込んだ。俺たちはその時から、同じような策謀を作り出すんだと心に決めた。そして、ぞっとするような誓いを立てて、永遠の愛情と友情を約束したんだ。(SJ, 23)

詩学的な考察の機会が、この箇所や他の幾つかの場面で示されながら

も、活かされぬままに終わる。別の例として、盗賊の仲間のひとりが、かつては作家として本当に惨めな生活をし、他の作家たちからの妬みにも苦しめられていたことが分かるという箇所がある。その盗賊は、自身の出来事を「[クリスティアーン・ハインリヒ・] シュピースや [カエタン・] チンク、あるいは他の流行作家の作風のように表現」(SJ, 125)しようとする。あるいは、主人公の属するシンダーハネスの盗賊団が、「彼らなら、盗賊のモールの役を見事に演じるだろうよ」(SJ, 256)と噂される箇所もある。しかし、これらはどれも、作品の中では僅かに仄めかされるだけであって、それ以上に深化させられることがない。『黒いヨナス』の物語には、何らの精密な設計も文学的な掘り下げもない。その文学作品としての破綻は明らかだ。創作におけるこの粗雑さから立ち上る無気力と救いようのなさ、そのテキストを文学の底辺に導く、度を越した暴力描写の連鎖へと下降して行く。

1839年、氾濫する盗賊小説を管理せねばならなかったある検閲官が、その報告書で不満を漏らしていた様子を、シュテファン・フュッセルは、ゲッティンゲンの図書施設に関する論考の中で次のように叙述している。

彼に引き起こされた苦しみは、その中に「あらゆる悪徳が無茶苦茶な過激さで」登場する盗賊譚を検閲することによるものだった。しかし、結末で少なくとも善が勝利すれば、彼は、その盗賊譚全体を禁じることがせず、専ら「性的な誘惑の危険があるという理由で」猥褻な描写に対する検閲だけを行うのだった²⁴⁾。

この検閲官の判断は、あらためて、同じ作者の『モール伯爵家』と『黒いヨナス』を分かち境界線を引くのに役立つであろう。一般的な〈盗賊

小説〉は、教養の高い人々にとっては渋々ではあったにせよ、一応は認知された娯楽小説のジャンルを確立していた。『モール伯爵家』は、そのジャンルの作品だった。これに対して『黒いヨナス』の方は、サドの作品で言えば、「非合法」の作品に分類される『ソドム百二十日あるいは放蕩学校』*Les Cent Vingt Journées de Sodome, ou l'École du libertinage* (1785 執筆)のように、秘密出版され、こっそり読まれる文学に区分されるべきものなのだ。この分類線の両側で、作家は、作品に対価を支払う読者による成功を見込むのである。文学市場の活性化の中で、需要に敏感に反応して供給に応じる生産が仮定される。1800年頃のドイツでは、過激な暴力描写の小説やあからさまなポルノグラフィへの関心が、まだそう多くはなかったが、明らかに発生していた。『黒いヨナス』は、その数少ない例に分類できよう。

トーマス・カミンスキーは、アルノルトがこうした作品を出した理由には、ますます逼迫する著者の経済的状況が大きく作用していたことに注意を促している²⁵⁾。多様化し、しかも、絶えず変化して、より強い刺激を求める読者の需要という圧迫の下で、アルノルトは、公的な生活や学術的な著作の執筆を犠牲にして、不本意ながら恐怖小説を矢継ぎ早に書かねばならなかった。アルノルトを含めた当時の多くの通俗作家たちが置かれていた厳しい境遇について、同時代のロンネブルクの作家で出版者でもあったフリードリヒ・アウグスト・ゴットリーブ・シューマンは、次のような言葉を残している——「読者はただ目配せするだけで良い。作家は大抵いつもすぐに支度のできた召使いなのだ」²⁶⁾。

十八世紀末は、今日のマスメディアに繋がる大量出版・大量消費の幕開けの時代だった。消費者の嗜好の過激化と、それに応えようとする作品の質の低下の関係は、すでにその最初期から露骨に現れていたのである。『モール伯爵家』はまだしも、『黒いヨナス』は、いまなら、この問題を

考える上でのひとつの適例として評価できよう。しかし、作品の文学としての価値については、また別の話である。おそらく現在も、それは当時の批評が下した値とほとんど変わるまい。そして、作者もこれに異議は申し立てないだろう。困窮した生活のために「心底からの嫌悪をもって」²⁷⁾通俗小説を書かねばならなかったアルノルト自身、そこには高い文学的評価など端から期待してはいなかったのだから。

注

- 1) *Neue allgemeine deutsche Bibliothek*, 10. Bd., 1. St. (1794), p. 275.
- 2) 貸本図書館については、Georg Jäger, Alberto Martino und Reinhard Wittmann, *Zur Geschichte der Leihbibliotheken im 18. und 19. Jahrhundert. In Die Leihbibliothek der Goethezeit. Exemplarische Kataloge zwischen 1790 und 1830*. Hrsg. mit einem Aufsatz zur Geschichte der Leihbibliotheken im 18. und 19. Jahrhundert von Georg Jäger, Alberto Martino und Reinhard Wittmann. Hildesheim, Gerstenberg, 1979, pp. 477-515.
- 3) Johann Heinrich Daniel Zschokke, *Abaellino der große Bandit*. Mit einem Nachwort hrsg. von Josef Morlo. St. Ingbert, Röhrig, 1994.
- 4) ヴルピウスについての論考には、Roberto Simanowski, *Die Verwaltung des Abenteuers'. Massenkultur um 1800 am Beispiel Christian August Vulpius*. Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1998 がある。また、彼の作品の書誌を含む資料は、Christian August Vulpius, *Eine Korrespondenz zur Kulturgeschichte der Goethezeit*. Bd 1: Brieftexte. Bd 2: Kommentar. Hrsg. von Andreas Meier. Berlin, de Gruyter, 2003.
- 5) 〈盗賊小説〉全般については、Holger Dainat, *Abaellino, Rinaldini und Konsorten. Zur Geschichte der Räuberromane in Deutschland*. Tübingen, Niemeyer, 1996. また、当時の盗賊については、ウーヴェ・ダンカー『盗賊の社会史』藤川芳郎訳、法政大学出版局、2005 (Uwe Danker, *Die Geschichte der Räuber und Gauner*. Düsseldorf & Zürich, Artemis & Winkler, 2001の和訳), pp. 364-373.
- 6) 以下にその代表的な作品の一部を挙げよう。

エルンスト・テーオドール・ユンガーの『カローロ・カロリーニ、盗賊団の首領、十六世紀半ばのアラベスク』*Carolo Carolini, der Räuberhauptmann. Eine Arabeske aus der Mitte des 16ten Jahrhunderts* (Prag &

Leipzig, 1800)

ヨーゼフ・アロイス・グライヒの『ピアンデット、トレヴィーゾの盗賊』 *Bianchetto, der Bandit von Treviso* (Leipzig, 1800)

ヨーハン・ヤコブ・ブリュックナーの『ディアノーラ、マルターニョ伯爵夫人、リナルド・リナルディーニの恋人』 *Dianora, Gräfin v. Martagno, Rinaldo Rinaldini's Geliebte* (Leipzig, 1799) と『アンゲーリカ、大盗賊オドアルドにしてザネルティ家のペスキア公の娘』 *Angelika, Tochter des großen Banditen Odoardo, Prinzen von Peschia aus dem Hauße Zanelli* (Leipzig, 1801)

ヨーハン・フリードリヒ・エルンスト・アルプレヒトの『盗賊ドルコ、リナルド・リナルディーニの同時代人』 *Dolko der Bandit, Zeitgenosse Rinaldos Rinaldinis* (Mainz & Hamburg, 1801)

ヨーハン・ダーニエル・ボルンシャインの海賊小説『兇漢コロナート、ヴェネツィアの暗殺者たちの首魁』 *Coronato der Schreckliche, Oberhaupt der Bravos von Venedig* (Eisenberg, 1801) と『アントニア・デッラ・ロッチーニ、海賊の女王、十七世紀の伝奇的な話』 *Antonia della Roccini, die Seeräuberkönigin. Eine romantische Geschichte des 17. Jahrhunderts* (Braunschweig, 1801)

ハインリヒ・フローライヒの筆名によるカール・ルートヴィヒ・ハインリヒ・バルデレーベンの『チェーザル・カファレリ、カーサラの伯爵、大胆な盗賊の大公』 *Cäsar Caffarelli, Graf von Casara, der kühne Räuber-Herzog* (Posen & Leipzig, 1803)

カール・ニコライの『カラストロの盗賊の巣窟』 *Die Banditenhöhle von Carastro* (Quedlinburg & Leipzig, 1818)

アウグスト・ライプロックの『気高い盗賊の首領アランゾ、スペインの谷と山地の恐怖』 *Aranzo der edle Räuberhauptmann. Ein Schrecken in Spaniens Thälern und Gebürgen* (Leipzig, 1820) と『ゴンザルヴォ、盗賊にしてアランゾの同時代人』 *Gonzalvo, Räuber und Zeitgenosse Aranzo's* (Leipzig, 1820) および『グァヴァンニ、ナポリの盗賊の恐るべき頭目』 *Guavanni: furchtbares Oberhaupt der Banditen zu Neapel* (Leipzig, 1822)

C・F・フリードリヒの筆名によるカール・フリードリヒ・リヒターの『大盗賊団の首領オルテリーノ、イタリアの恐怖と戦慄、伝奇的な話』 *Ortellino der grosse Räuberhauptmann. Italiens Furcht und Schrecken. Eine romantische Geschichte* (Mannheim, 1823)

ゲオルク・カール・フリードリヒ・シェップファーの『マチュエライオ

あるいは、岩谷の盗賊団、近代の盗賊譚』*Macellaio oder die Räuber in den Felsenklüften. Eine Räubergeschichte neuerer Zeit* (Nordhausen, 1832)

フリードリヒ・バルテルスの『カラブリア人、あるいは、恐るべきフランケンベルク人、イタリア＝フランス戦争の時代の伝奇的な歴史的盗賊譚』*Der Calabrese, oder der schreckliche Frankenwürger. Romantisch-historische Räubergeschichte aus dem italienisch-französischem Kriege* (Nordhausen, 1833) と『ディアヴォロ、あるいはナポリのドイツ人悪魔、身の毛のよだつ盗賊譚』*Diavolo, oder der deutsche Teufel in Neapel. Eine schauerhafte Räubergeschichte* (Nordhausen, 1834)

J・H・バルダの『気高い盗賊の首領グィヴァンノ・モンテベッコと兇漢コロマルドあるいは稀代の悪人の凶行』*Guivanno Montobello, der edle Räuberchef und Colomardo der Schreckliche oder Gräueltaten eines seltenen Bösewichts* (Weimar, s. d.) そして、本名のヨーゼフ・ハインリヒ・ベッケル名義では次の二つの盗賊小説『フランチェスコ・デ・カステレット、恩義ある盗賊の首領あるいは、ソレンティーノ城の身震いする地下納骨堂での失敗した犯罪』*Francesco de Castelletto, der dankbare Banditenchef oder das vereitelte Verbrechen in den Schaudergewölben des Schlosses Sorentino* (Nordhausen, 1833) と『オドアルド・ミランドーロ、山地の怖れられた盗賊の首領、あるいは、不幸の仲間たち』*Odoardo Mirandolo, der gefürchtete Räuberchef der Gebirge, oder: die Unglücksgenossen* (Nordhausen, 1834)

また、ヴルピウス自身『リナルド・リナルディーニ』の続篇『フェランディーノ、盗賊団の首領リナルディーニの話の続篇』*Ferrandino. Fortsetzung der Geschichte des Räuber-Hauptmanns Rinaldini* (Leipzig, 1800-01) および『リオナルド・モンテ・ベッコあるいはカルボナリ党、盗賊団の首領リナルディーニの話の続篇』*Lionardo Monte Bello oder der Carbonari-Bund* (Leipzig, 1821) や『大悪党グロリオーズ、十八世紀の話』*Glorioso der grosse Teufel. Eine Geschichte des achtzehnten Jahrhunderts* (Rudolstadt, 1800) といった同ジャンルの作品を刊行している。

その他の盗賊小説の書名については、Holger Dainat, *Abaellino, Rinaldini und Konsorten*, 1996 の書誌 (pp. 284-289) を参照のこと。

- 7) Gustav Sichelshmidt, *Liebe, Mord und Abenteuer. Eine Geschichte der deutschen Unterhaltungsliteratur*. Berlin, Haude & Spener, 1969, p. 102.
- 8) アルノルトは、選帝侯侍従長でオルガニストのヨーハン・フィーリップ・アルノルトの子として1774年エアフルトに生まれた。同地のカトリック系のギュムナージウムを卒業後、エアフルト大学で法学の学位を取得し(後

には医学の学位も取っている)、大学書記、オルガニスト、音楽教師として活動した。また大学講師として、脳と頭蓋の構造に関するフランツ・ヨーゼフ・ガルの体系、経験心理学、政治学そして美学についての講義を行った。1800年に結婚して二人の子をもうけたが、ほどなくして神経を病んで癲狂院に送られた。退院すると再び講義を続け、1812年に病没するまで通俗小説の執筆にも精を出した。アルノルトはその音楽的才能の故にしばしばE. T. A. ホフマンと比較される。それは、エアフルトのウルスラ会の教会、後にはセヴェリ教会で九十以上の有名な作曲家のミサ曲を演奏したことや、モーツァルト、ハイドン、ディッターズドルフのモノグラフィーを含む音楽史的著作を書いたことによって示されている。1801年の父の死後からアルノルトを襲った恒常的な経済的困窮が恐怖小説の創作へとアルノルトを駆り立てた。1798年から1812年までの間に彼は、現在確認されているだけで五十七もの作品を書いた。それにはゴータの劇場年鑑や子供向け雑誌への寄稿などもあるが、四十八作を数える小説の大半は、作者の、恐ろしいものや不気味なもの、陰惨な犯罪などへの関心と、それに呼応した魔術や隠秘学への傾倒を示している。そうしたアルノルトの代表作を、今回採り上げる二作品を除き挙げておこう。『灰色の天使、東洋の物語』*Der graue Engel. Eine orientalische Erzählung* (Rudolstadt, 1798)、『赤い袖の男、幽霊譚』*Der Mann mit dem rothen Ermel. Eine Geistergeschichte* (Gotha, 1798-99)、『血の染みのある肖像画、実話による幽霊譚』*Das Bildniß mit den Blutflecken. Eine Geistergeschichte nach einer wahren Anekdote* (Zerbst, 1800)、『分身のいるウルスラ会修道女、灰色の仮面のR伯爵の手記から／パウリーナ王女、妻、母にしてウルスラ会修道女、灰色の仮面のR伯爵の回想録から』*Die doppelte Ursulinernonne. Aus den Papieren des Grafen R. mit der aschgrauen Maske/Prinzessin Paulina oder Gattin, Mutter und Ursulinernonne zugleich. Aus den Memoirs des Grafen R. mit der aschgrauen Maske* (Rudolstadt, 1800)、『吸血鬼』*Der Vampyr* (Schneeberg, 1801) (ただしこれは、残念ながら現存するテキストが確認されていない)。『夢遊病の女あるいは恐るべき暗黒の結社、現在は国事犯としてS.に収監されているF***n伯爵の回想録から』*Die Nachtwandlerin oder die schrecklichen Bundesgenossen der Finsterniss. Aus den Memoiren des Grafen F***n, gegenwärtigen Staatsgefangenen zu S.* (Hamburg & Mainz, 1802) と『ミラクローゾあるいは恐るべき結社イルミナーティ、ある国事犯とヴィシェフラットの赤い仮面の男の遺稿からのある侯爵一家の描写』*Mirakuloso oder der Schreckensbund Illuminaten. Ein fürstliches Familiengemälde aus dem Nachlass eines Staatsverbrechers und*

der rothen Maske auf dem Vischerad (Coburg, 1802) は、シラーの『招霊術師、O**伯爵の回想録より』*Der Geisterseher. Aus den Memoires des Grafen von O*** (1789) の影響下に秘密結社を題材に書かれた小説である。さらに、『墓の上での婚礼の接吻、あるいはマリーエンガルテン教会での真夜中の結婚』*Der Brautkuß auf dem Grabe, oder die Trauung um Mitternacht in der Kirche zu Mariengarten* (Rudolstadt & Arnstadt, 1801), 『エウリダーネ、地獄の娘、坊主譚にして幽霊譚、ポルタレグレ伯爵の遺稿から』*Euridane, die Tochter der Hölle. Ein Pfaffen- und Geistergeschichte. Aus dem Nachlass des Grafen Portalegre* (Hamburg, 1803) などの作品がある。アルノルトは、これらの作品出版当時は人気があったが同時代の他のほとんどのドイツの通俗小説作家と同様、現在では一般には忘れ去られている。

Thomas Kaminski, Theodor Ferdinand Kajetan Arnold (1776-1812). In *Populäre Erscheinungen. Der deutsche Schauerroman um 1800*. Hrsg. von Barry Murnane & Andrew Cusack. Paderborn, Wilhelm Fink, 2011, pp. 173-191.

- 9) 使用したテキストは以下の通り。*Die Grafen von Moor. Ein Familiengemälde*. 2 Bde. Rudolstadt, Langbein und Klüger, 1802. ここからの引用は (GvM, 頁数) の略記を付して本文中に示した。また, *Die Bearbeitungen, Fortsetzungen und Nachahmungen von Schillers „Räubern“ (1782-1802)*. Hrsg. von Wilhelm Rullmann. Berlin, Selbstverlag der Gesellschaft für Theatergeschichte, 1910, pp. 115-135 も参照した。
- 10) 同趣向の小説には、ヨハンナ・イザベラ・エレオノーレ・フォン・ヴァレンロートの『古い塔での別れの場面以後のカール・モールとその仲間たち』*Karl Moor und seine Genossen nach der Abschiedscene beim alten Thurm* (Mainz & Hamburg, 1801) などがある。
- 11) 使用したテキストは以下の通り。*Der schwarze Jonas, Kapuziner, Räuber und Mordbrenner. Ein Blutgemälde aus der furchtbaren Genossenschaft des berüchtigten Schinderhannes. Aus seinem Inquisitions-Protokoll gezogen*. Erfurt, Wilhelm Hennings, 1805.
引用には、複写覆刻版 *Der schwarze Jonas*. Mit einem Vorw. von Hans-Friedrich Foltin. Hildesheim & New York, Olms, 1972 を用い、(SJ, 頁数) の略記を付して本文中に示した。
- 12) アルノルトは、シンダーハネス自体を題材にした作品も書いている。『シンダーハネス、公称ビュックラー、悪名高い盗賊団の首領』*Schinderhannes, Bueckler genannt, der berühmte Räuberhauptmann* (Erfurt,

- 1802)
- 13) Hans-Friedrich Foltin, Vorwort zur Reprint-Ausgabe *Der schwarze Jonas* (1972), p. XXI.
 - 14) *Neue allgemeine deutsche Bibliothek*, 101. Bd., 1. St. (1805), p. 65.
 - 15) *Jenaische Allgemeine Literaturzeitung*, 3. Jg. (1806), Bd. 1, Nr. 48, Sp. 383.
 - 16) Michael Titzmann, Sexualität und Anthropologie in der französischen Aufklärung: Der philosophisch-pornographische Roman. In *Anthropologie der Goethezeit* (Studien und Texte zur Sozialgeschichte der Literatur 119). Hrsg. von Wolfgang Lukas & Claus-Michael Ort. Berlin, de Gruyter, 2011, pp. 433-483, p. 453.
 - 17) Julia Bohnengel, *Sade in Deutschland. Eine Spurensuche im 18. und 19. Jahrhundert. Mit einer Dokumentation deutschsprachiger Rezeptionszeugnisse zur Sade 1768-1899*. St. Ingbert, Röhrig, 2003, pp. 200-229.
 - 18) Donatien Alphonse François Marquis de Sade, Lorenza und Antonio. Eine italiänische Novelle. In *Verbrechen der Liebe. Drei Erzählungen in der wiederentdeckten ersten deutschen Sade-Übersetzung*. Mit einem Nachwort hrsg. von Julia Bohnengel. St. Ingber, Röhrig, 2001, pp. 28-76, p. 71.
 - 19) *op.cit.*, p. 73.
 - 20) *op.cit.*, p. 73.
 - 21) Christoph Einsiedl, Beschreibung der gräßlichen Mordthaten sammt dem Todesurteil über die Menschenfresser, und Räuber-Bande in Hungarn. Nach der wahren Geschichte geschildert. Wien. gedruckt mit Jahnischen Schriften, 1782. — Holger Dainat, »Die Rache schläft nicht«! Über die Räuberromane von Albrecht und Arnold. In *Subversive Literatur. Erfurter Autoren und Verlage im Zeitalter der Französischen Revolution (1780-1806)*. Hrsg. von Dirk Sangmeister und Martin Mulsow. Göttingen, Wallstein, 2014, pp. 454-478, p. 470.
 - 22) そうした作品の一部を以下に挙げる。

ハインリヒ・アウグスト・ケルンデルファーの『マティアス・クロスターマイアー、所謂バイエルンのヒーゼル、われわれの時代の実話、脚色されたもの』*Matthias Klostermay'r, der sogenannte Bayerische Hiesel. Eine wahre Geschichte unsrer Zeiten. Dramatisch bearbeitet* (Leipzig, 1800)

ゴットリープ・ベルトラント『マザリーノ、ロートリンゲンとアルザスの大盗賊』*Mazarino, der großeRäuber in Lothringen und im Elsass* (Lüneburg, 1802-03)

ヨーハン・エルンスト・ダーニエル・ボルンシャインの『犬革職人あるいは、ある悪人の人生の中の出来事、人間の姿をした悪魔の陳列室への一寄与』*Der Hundssattler oder Szenen aus dem Leben eines Bösewichts. Ein Beitrag zur Gallerie menschlicher Teufel* (Eisenberg, 1805) と『ニッケル・リスト、通称フォン・デア・モーゼルの恐るべき冒険、「マザリーノ」の著者ゴットリーブ・ベルトラントにより伝奇的に叙述されたもの』*Der furchtbare Abenteurer Nikel List, genannt von der Mosel. Romantisch dargestellt von Gottlieb Bertrand, Verfasser des Mazarino* (Braunschweig, 1806)

その他のこの種の作品の書名についても、Holger Dainat, *Abaellino, Rinaldini und Konsorten* の書誌を参照のこと。

- 23) これによって、盗賊小説は通俗小説として、虚構の盗賊の物語へという重要な展開の切っ掛けを手に入れることにもなった。
- 24) Stephan Füssel, *Leihbibliotheken und Leseinstitute in der Universitätsstadt Göttingen*. In *Die Leihbibliothek als Institution des literarischen Lebens im 18. und 19. Jahrhundert. Organisationsformen, Bestände und Publikum*. Hrsg. von Georg Jäger und Jörg Schönert. Hamburg, Hauswedell, 1980, pp. 229-251, p. 240.
- 25) Thomas Kaminski, *op.cit.*, pp. 190-191.
- 26) [Friedrich August Gottlieb Schumann], *Selbstgeständnisse eines elenden Scribenten*. In *Die changeante Mappe. Enthaltend antike und moderne Zeichnungen*. Hrsg. von Gabriel Stein. Bd.1. Berlin & Leipzig, Nicolai, 1796, pp. 149-170, p. 158.
 通俗作家たちの辛い立場について、ディルク・ザングマイスターは、アルノルトがそれまでほとんど専属として小説を書いていた出版社から突然仕事を切られた時の悲惨な状況を伝える1806年1月18日付の書簡を資料のひとつに挙げながら概説している。Dirk Sangmeister, *Zehn Thesen zu Produktion, Rezeption und Erforschung des Schauerromans um 1800*. In *Lichtenberg-Jahrbuch 2010*. Herausgegeben im Auftrag der Lichtenberg-Gesellschaftm Auftrag der Lichtenberg-Gesellschaft. Hrsg. von Ulrich Joost & Alexander Neumann. Heidelberg, Winter, 2010, pp. 177-217, p. 185.
- 27) Theodor Ferdinand Kajetan Arnold, *Vorbericht zu Amalie Balbi. Eine wunderbare Vision, die ich selbst gehabt habe*. Erfurt, Hennings, p. 15.